

投稿

上関町の中間貯蔵施設建設中止を求める署名 275,043筆！

原発いらん！山口ネットワーク 三浦 翠

2024年2月7日、「上関町中間貯蔵施設建設中止を求める署名」275,043筆を中国電力本社に運び込んだ。昨年10月から5団体(原発に反対する上関町民の会・上関原発を建てさせない祝島島民の会・上関の自然を守る会・原発いらん！山口ネットワーク・原水爆禁止山口県民会議)がそれぞれのネットワークを通じて全国に呼びかけた署名だ。



中国電力本社で署名を提出(2月7日)

たった3～4か月の間に集まったこの署名の筆数の多さは誰にとっても驚きであり、大きく私たちの背中を押してくれる力となった。協力してくださった美浜の会や避難計画を案ずる関西連絡会の皆様そして全国の皆様ありがとうございました。

署名用紙の入った10数個の段ボール箱の列を前にして中電が言ったことは、相変わらずの「脱炭素の電源として原発は必要。そのためには中間貯蔵施設建設は必要。上関町の振興のために原発と中間貯蔵施設の両方を進めていく。」と。

一方、同時に進めた関西電力への署名は、関電が受け取りの場所さえ設けないという事態に驚き、どう対処するかは5団体で検討中だ。

中電への署名提出も、これを報じたのは新聞では朝日新聞のみで、普段上関原発関連のニュースはもれなく報道する中国新聞に全く記事がなかったことが話題に。この日の中国新聞にはNUMOの大きな広告が載っていた。この計画には国が深く関わっていることがうかがえる。

中間貯蔵を進める側にとってはこの署名の数の多さは広く知られたくないのだろう。

◆中国電力の森林伐採前に、国会議員や住民が抗議集会

中国電力は2023年8月21日に上関町に調査のための伐採届を出していたが、11月20日に期限切れとなり、12月22日に再提出。2024年1月24日森林伐採に取り掛かった。

これに先立つ2024年1月18日には国会議員2人、立憲民主党の山崎誠氏と「れいわ」の大島九州男氏それに元法務大臣の平岡秀夫氏も加わって3人が現地を視察。翌19日には地元3団体＝祝島島民の会、上関町民の会、上関の自然を守る会の呼びかけで、午前8時から50人が尾熊毛の中電事務所前に集まり抗議集会を持った。

「上関町に来る人はみんな海が美しい、自然が素晴らしいという。私たちは決してこの自然を壊させない。この海域全体が生物多様性国際条約で守るべき海域とされており、この条約は閣議

決定もされている。中間貯蔵施設建設のために、大規模に山を削ることや海を埋めることなど決して許さない」との決意を共有した集会となった。地元団体による中間貯蔵施設反対の初の決起集会だ。

国会では2月28日に院内集会も予定されている。日本生態学会から安溪先生夫妻、上関の自然を守る会の高島美登里さん、環瀬戸内海会議副代表で反げんぱつ新聞の末田一秀さんの講演がある。

◆議会への説明は非公開。住民への説明会には応じず

中国電力は2024年1月30日から、周辺1市3町からの要請を受けてそれぞれの議会への説明を始めた。非公開だ。市民町民が公開を求めても応じない。光市の市川市長は「中電に説明に来るよう要望する気はない」と発言している、

村岡山口県知事は2023年12月26日の記者会見で、22年前、当時の二井関成知事が上関原発計画に同意する際に示した「使用済み核燃料を新たな施設で長期にわたって保管することは望ましくない」とした「知事意見」の基本的な考え方を踏襲することを明らかにした。

そのうえで、「原発本体と他地域の使用済み核燃料を保管する中間貯蔵施設が同じエリアに存在することは過大な負担だとして、今後中電に確認が必要と発言している。

上関町の西町長は国が認めれば県知事の同意は必要ないと言っており、11月24日には半年分の交付金7,442万円を申請。12月13日の町議会では「使用済み核燃料はゴミではなく資源である。」と発言。

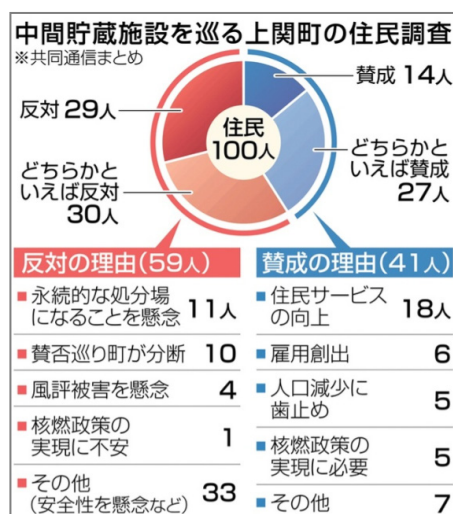
12月23日の中国新聞には山口県と上関町に6億円、中間貯蔵施設調査で交付金増額という記事がある。国の関与が強いことがうかがえる。

◆美しい、平和な町として上関町が息を吹きかえすために

これまで中電が42年間上関町に50人の社員を常駐させ、町民のプライバシーを握り、町民を分断して原発推進7対反対3に抑え込んできた上関町だが、共同通信が町の実態に沿うように工夫して行ったアンケートによると、中間貯蔵施設建設に反対の町民が60%とでている。

それに今、上関町民自身の手で様々な取り組みがあり、マラソン大会に町内外から400人以上の参加者が集まったり、原発推進反対の枠を超えての魚の直売や、上関のいい所を見つけるプロジェクトなど若く新しい取り組みがはじまっている。

原子力政策の行き詰まりの闇をはねのけて、美しい、平和な町として上関町が息を吹きかえす芽はいっぱいあると感じる。そのために周辺に住む私たちも一緒に歩みたいとおもう。



2023.12.25 西日本新聞より